人間文化創成科学論叢　第14巻　2011年

17、18世紀フランスにおけるアンディエンヌ

―リシュリュー・コレクションの織物見本集とポンパドゥール夫人の財産目録の分析を通して―

権　　裕　美*

Indienne en France entre le XVIIe siècle et le XVIIIe siècle :

A partir de l'étude sur les Spécimens de la Collection Richelieu et de l'Inventaire des biens de Madame de Pompadour

KWON Youmi

abstract

L'indienne est un tissu peint ou imprimé importé des comptoirs des Indes. Ces étoffes eurent beaucoup de succès depuis que la France a commencé à les importer de la Compagnie des Indes au XVIIe siècle en grosse quantité. Le terme indienne aura progressivement une large utilisation; les tissus et leurs imitations produites en France qui s'échangeaient dans le marché international connurent des appellations variées. Ainsi, cette étude examine les différentes appellations de l'indienne à partir de l'inventaire des spécimens de la collection Richelieu qui rassemble tous les spécimens de tissus fabriqués en France au XVIIIe siècle, puis de l'inventaire des biens de Madame de Pompadour qui nous donne une explication sur l'usage de chaque tissu. De cette manière, nous avons découvert que ces étoffes doivent leurs différentes appellations aux noms des régions turque, indienne ou africaine où elles ont été l'objet de commerce; les imitations fabriquées en France ont gagné leurs noms d'après les noms des lieux d'origine. Cette diversité d'appellation montre que les tissus ont été échangés et imités très vivement dans le monde, et qu'ils ont été consommés en grande masse. De plus, elle nous montre que les différents tissus ont été utilisés non seulement pour fabriquer des vêtements, mais aussi pour la décoration intérieure; cela est un témoignage sur le succès de l'indienne.

Key words : France, Indienne, Richelieu collection, Madame de Pompadour, Textile

1．序

フランス語の名詞「アンディエンヌ」indienneとは、インドから渡来した綿布、すなわちインド綿布のことを指し示すことばである。フランスが17世紀後半に、東インド会社により、アンディエンヌを大量に輸入するようになると、アンディエンヌは多様で繊細なデザインや美しい色彩に加え、堅牢度が高く、軽いという特徴のゆえにヨーロッパで大流行になった。したがって、アンディエンヌということばも、次第にその意味範囲を広げ、東洋渡来の綿布を指すばかりか、ヨーロッパにおける模造品もそのように呼ばれた。しかも、東洋渡来の綿布は、アンディエンヌの他に多様な名称を持つにいたった。

キーワード：フランス、アンディエンヌ、リシュリュー・コレクション、ポンパドゥール夫人、織物

＊平成21年度生　比較社会文化学専攻

アンディエンヌの研究については貿易史の領域では、深沢克己氏による重要な研究がある。深沢氏の『商人と更紗：近世フランス＝レヴァント貿易史研究』は、レヴァント貿易の独占的拠点であったマルセイユを中心に、綿布の国際商業について論じ、アンディエンヌの交易やヨーロッパへのインドの捺染技術伝播について明らかにしている[1]。一方、服飾品としてのアンディエンヌが衣服としてどのように使われていたかについては、未だ詳細に研究されておらず、織物史の全般を扱った概説書で簡単に触れられているだけである[2]。

本論文では、アンディエンヌということばの定義を明確にするとともに、それに類することばにどのようなものがあり、何を示しているのかを明らかにしたい。つまり、綿布を指すことばの多様性は、このような種類の布がいかに好まれたかを示しており、アンディエンヌの流行を考える上で重要なことであると思われるからである。それゆえ、ここでは、リシュリュー・コレクションにおける織物の見本集とポンパドゥール夫人の財産目録を用いて、アンディエンヌおよび綿布を表すことばについて分析を行う。

フランス国立図書館に所蔵されているリシュリュー・コレクションには、国王の側近として重責を果たした、元帥リシュリュー公爵（1696－1788年）の主導の下、収集・整理された見本集が含まれている[3]。それは、彼の死後、整理された財産目録に、「われらが時代の逸話・版画・肖像・地図・儀式」と題された二折判の手稿本52巻の中の、絹・綿・麻などの織物の見本集のことである[4]。見本集には所蔵番号LH45からLH45(F)までの７冊に整理され、1720年から1737年までのフランス国内および国外で生産された、あらゆる種類の織物が収録されている。また生産地・生産年・織物組織・用途・値段などが、部分的に手描きで書き込まれている。第１巻である所蔵番号LH45には、リヨンLyon産織物、アブヴィルAbbeville、ニームNîmes、ルアンRouen、マルセイユMarseilleなど、フランスの各地で生産された様々な織物が収録されており、ここには、1736年にマルセイユで生産されたアンディエンヌおよび綿布が収録されている。第２巻の所蔵番号LH45(A)には、ペルピニャンPerpignan、カタローニュCatalogneなどで生産されたレース、リボン、テープなどの装飾用の織物が収録され、第３巻の所蔵番号LH45(B)には、絹織物、毛織物、ベルベットなどが主に収録されている。そして第４巻の所蔵番号LH45(C)は、綿織物でほぼ占められ、第５巻の所蔵番号LH45(D)は、1736年オランダで生産された織物を主に収録している。第６巻の所蔵番号LH45(E)と最後の第７巻である所蔵番号LH(F)は、リボンの見本だけを収録している。アンディエンヌと綿織物は、第１巻と第４巻に主に収録され、生産地・生産年・織物組織・用途・値段などが部分的に手描きで説明されている。

一方、ポンパドゥール夫人（1721－64年）の財産目録からはあらゆる布の用途を把握することができる。この財産目録は、パリやその近郊に壮大な邸宅を多く所有していた夫人が、それぞれの邸宅に残した遺品を記録したものである。ポンパドゥール夫人が、死ぬ直前まで、絶え間なく家具や芸術作品を過剰に購入していたこともあり、財産目録には、寝台・椅子・カーテンなどに用いられた綿布の名称が記され、どのような綿布がいかなる用途で使用されたかを知ることができる。財産目録記録は、1764年６月から開始され、1765年７月に終了している[5]。目録は1939年に刊本として発行され、夫人の19箇所の大邸宅と城における遺品が目録番号2864番まで記録されている[6]。この目録については、ポンパドゥール夫人のトルコ風趣味を論じた林精子氏が既に分析を進めており、夫人がトルコ風衣装を所有し、日常生活の中で着用した可能性があることを指摘している[7]。

２．アンディエンヌ（Indienne）

アンディエンヌということばの意味について探る前に、ほぼ同じ綿布を指すと思われる「トワル・パント」toile peinte や「トワル・アンプリメ」toile imprimée ということばを知っておく必要がある。トワル・パントとは「手描き染めの布」を意味し、トワル・アンプリメは「プリントされた布地」の意味で、いずれも色模様が染織された布地を表すことばである。実際、17・18世紀のモード雑誌および経済書では、東洋渡来の綿布に色模様されたものを「トワル・パント」や「トワル・アンプリメ」ということばで記載している場合が多く[8]、アンディエンヌと同様に使われていたと思われる。

1680年に出版されたピエール・リシュレーの『フランス語辞典』には、アンディエンヌとは、「人物・花・その他の柄がプリントされた布地で、部屋着に使われた」[9]と記載されている。一方、1690年に初版が出たアントワーヌ・フュルティエールの辞典では、「インド人の方式で作られ流行となった部屋着。この部屋着は大きな袖

を持つインド人の方式で作られたもので、インド由来の多様な色彩と図柄の布地で作られる。また、フランスで薄い羊毛とリネンで模造されたものも、アンディエンヌと呼ばれる」[10]と説明され、薄い羊毛とリネンで作られた模造品もアンディエンヌと呼ばれたことがわかる。さらに、18世紀中葉のジャック・サヴァリ・デ・ブリュスロンによれば、「東洋のインドから伝わり、多様な色彩や図柄がプリントされた綿で作られた男女の部屋着。また、部屋着を作った布地、インドで作られプリントされた布地、ヨーロッパで模造された布地の同種も、アンディエンヌと呼ぶ」[11]とされる。19世紀には、アンリ・アヴァールが、「中国またはインドから輸入された布地の大部分に、まずこの名称が使われる。アンディエンヌという名称は、毛織物や絹織物にも使用された」[12]と述べている。

要するに、アンディエンヌということばは、インドでプリントされた多様な色彩や図柄が手描き染め、またはプリントされた綿布に対する名称であり、またこれらのアンディエンヌで作られた部屋着を指すことばである。さらにそれを真似したヨーロッパ産の模造品までを含む非常に広い意味を持つことばである。しかも、綿布のほかにも薄い羊毛とリネンで模造した布地に対しても、アンディエンヌの呼称が使われていた。また、インドだけではなく、中国から輸入された布地もアンディエンヌと呼ばれ、絵柄染めであれば綿織物に限らず毛織物や絹織物も、アンディエンヌに含まれていたようである。

では、アンディエンヌは、どのようなものに使用されていたのであろうか。ポンパドゥール夫人の財産目録には、49件のアンディエンヌ、および13件のトワル・パントが記載されている。それらは、パリやヴェルサイユに所在する多くの大邸宅において、主に室内の調度品などに用いられたものである。なかでもベッドカバーへの使用例が多く、カーテンや椅子のカバー、クッションのカバーにも使われている。さらにレイニー大邸宅Hôtel de la Reynieの衣装保管部屋には、黒色と白色からなるアンディエンヌ・ローブが存在していたことが目録に明記されている[13]。

3．ギネー（Guinée）

リシュリュー・コレクションにおける織物の見本集には、1736年にマルセイユで生産され、「アンディエンヌまたはギネー」Indiennes ou Guinéesと説明された布見本が、整理番号126番から136番まで全11点が収録されている。それらは、白地または青地に褐色・赤・緑・黒を用いて、花と枝葉を手描きで染めた織物である。価格は１パンあたり、10ソルから14ソルほどであったことが記録されている[14]。たとえば、整理番号134番と136番のものは、いずれも布幅４パン1/4、長さ68パンで、値段は１パンあたり、それぞれ12ソルと14ソルと記されている。どちらも白地に黒の輪郭線で柔軟な植物模様を描き、緑・赤・紫で色を染めたデザインである。

「ギネー」Guinéeとは、ピエール・リシュレーの『フランス語辞典』によれば、「東洋のインド、とりわけポンディシェリPondichériから伝わった、粗野というより上質の白綿布」[15]を意味するとされる。ポンディシェリとは、インド西部のコロマンデル海岸に面した地域で、フランス・東インド会社の拠点である。東インド会社は、ポンディシェリに拠点を築き、安全な交易の場を確保し、商業活動を行った[16]。さらに、19世紀のアンリ・アヴァールも、ギネーをほぼ同様に説明しており「白い綿布で、自然のままのもの、または濃いブルーで染められたもので、コロマンデル海岸から大量に輸入したもの」[17]と述べている。ゆえに、ギネーはインドから輸入された白綿布と見なされているが、リシュリュー・コレクションにおける見本集では、アンディエンヌと同じく、綿布の上に多様な模様と色彩がプリントされたものをギネーとしている（図１参照）。

そもそもギネーということばは、西アフリカにある国の名称である。19世紀末にフランスの植民地になったが、1958年に独立を果たし、現在も共通語はフランス語を使用する国、すなわちギニア共和国のことである。しかし、歴史上においてはアフリカ大陸西端のベルデ岬からアンゴラに至る大西洋岸の地域を指し、この沿岸地域をめぐり、すでに17世紀にはイギリス、オランダ、フランスの商館が設立されていた[18]。フランスはブラン岬からシエラレオネ川右岸までの貿易特権を有するセネガル会社と、シエラレオネ川から喜望峰までの地域における商取引を独占するギニア会社を、1685年に設立し、西アフリカ地域との貿易が盛んに行われていた[19]。この貿易関係については、藤井真理氏が詳細に調査しており、氏は西アフリカ商業網を説明しながら、貿易の取引商品の一つとしてギネーを挙げている。加えて、ギネーと呼ばれるインド・コロマンデル海岸製の青色綿布およびポンディシェリを中心とするインド東海岸製の綿布が、フランス本国に輸入され、それがセネガルに再輸出されてい

たことを指摘している[20]。藤井氏の調査を借りれば 、リシュリュー・コレクションに収録されている様々な色彩で模様が染められたギネーとは、インドから輸入された無地の綿布に、自由港マルセイユで色彩と模様をプリントしたものであると考えられる。

4．アゼミ（Agemis）

「アゼミ」Agemisと名づけられた三つの布見本が、リシュリュー・コレクションに収録されている。この三つの見本には、整理番号137番から139番までが割り振られており、青地に黒で枝葉が描かれ、赤色で花模様が染め付けられており、マルセイユ製と記録されている（図２）。いずれの布見本も、デザインにおいても色彩においてもきわめて類似したものである。また三点の見本は、いずれも本来は58パンの長さであり、たとえば、137番と138番は幅２パン3/4で、価格は１ピースあたり14から15リーヴル、139番は幅３パンで、価格は１ピースあたり15リーヴルである。このように、布の大きさや値段の面でも三点は類似している[21]。

アゼミということばは、18世紀の辞典および歴史書では見つからない。だが、綴りは若干異なるものの深沢氏の書物には、「アジャミ」Ajamis という「アインタブ製の白綿布」がシリアのアレッポalepで取引されたという説明がある。リシュリュー・コレクションに収録されているアゼミは、深沢氏の言及するアジャミという綿布のことであろう。アインタブはトルコの町であり、今日ではガズィアンテプと呼ばれる町である。ここで生産されたアジャミは、アレッポから輸入されていたということである[22]。このような貿易路を考えると、リシュリュー・コレクションに収録されているアゼミは、アレッポから輸入された白綿布に、マルセイユで色と模様をプリントしたものと思われる。

図１《Indiennes ou Guinées》

Maréchal de Richelieu, *Echantillons d'Etoffes et Toiles des Manufactures de France et étrangères*, 1732-1737, Paris ; LH45-FOL, no.133, フランス国立図書館所蔵。

図２《Agemis》

Ibid., no.137, 138, 139.

図３《Indiennes St.Joseph ou Chiffracanni d'alep》

Ibid., no.140.

5．アンディエンヌ・サン・.ジョゼフまたはシフラカニ・ダレプ（Indiennes St.Joseph ou Chiffracanni d'alep）

リシュリュー・コレクションには、「アンディエンヌ・サン・ジョゼフまたはシフラカニ・ダレプ」Indiennes S.Jopseph ou Chiffracanni d'alepと表記されているものが１点ある（図３）。これは、整理番号140番の布見本で、白地に赤い小花を描いたものである。

ここで言う「サン・ジョゼフ」St.Jopsephとは、フランスが設立したセネガル会社のサン・ジョゼフ商館のことであると推測される。この商館は、1714年にセネガル河川交通路の有効活用のため、河川の上流域に建設された新商館で、内陸との直接交渉基地として奴隷貿易に大きな役割を果たしたことが知られている[23]。藤井氏によれば、西アフリカにおける商業網では、武器・装身具用品とともに、ギネーを含む上質綿布が主な貿易品であったという[24]。そうであるなら、アンディエンヌ・サン・ジョゼフは、セネガル会社の居留地の一つであるサン・ジョゼフ商館を拠点として取引された貿易品の綿布であると考えられる。

他方で、「シフラカニ」Chiffracanniに関しては、その実態がすでに深沢氏の研究で明らかになっている。氏の研究によれば、「シャフラカニ」Chafracanisはトルコ東南部の都市ディヤルバクルで製造された布である。茜の媒染のみを用いた一色あるいは二色染めで、その多くが赤地または紫地に白い小花模様を散らした捺染布である。これは、西北インドで古くから製造されていた「ジャフラカニ」Jafracanisと呼ばれる綿布と同種の製品であり、その技法が、トルコの商人を介して、この地に伝来したことを深沢氏はつきとめている。とくにマルセイユの商人たちは、この種の綿布を大量に輸入し取引を行っていたという[25]。

上述の通りアレッポalepとは、中世から栄え、交易の中心地であったシリアの町である。主要産業は金糸・綿織物・プリント布・モスリンなどの生産で、フランスやイギリス、オーストリアの国々は、これらをアレッポで求めたことが知られている[26]。18世紀のアレッポ市場におけるフランス商人の取引は、毛織物の販売と綿布の購入を基本とし、先述のアゼミを思わせる「アジャミ」Ajamiと「シャフラカニ」Chafracanisが輸入品の半分以上を占めていたとされる[27]。つまり、綿布が取引されたのはこのアレッポであり、リシュリュー・コレクションのシフラカニも「ダレプ」d'Alepと呼んでいるのは、そのためである。

6．ペルス（Perse）

フランス語でイランの古名「ペルシア」を意味する「ペルス」Perseも、アンディエンヌの一種を指すことばである。そもそもインドで作られ、ヨーロッパに輸出されたアンディエンヌは、主に東南部のコロマンデル海岸のものであった。コロマンデル海岸地域の中でマスリパトナムを中心とした北部は、サファヴィー朝ペルシアとの間に政治・経済・文化などの面で密接な関係を保っていた。1620年代から両国の間では交易が発達しており、ゴルコンダから綿布を輸出し、その対価としてペルシアから軍用馬を輸入した。ペルシアに輸出された綿布は、ベッドカバーやテーブルクロスなどの室内装飾や上衣の裏地などに使用されていたといわれている。この綿布は絵画的な形象をあらわした芸術性の高い手描き染めで、図柄にはペルシア芸術の影響が濃厚にみられる。フランスでペルスと呼ばれた布は、この種のコロマンデル製手描き染めの綿布であり、その一部はペルシア隊商路によりレヴァント市場に運ばれ、地中海経由でヨーロッパに輸入されていたと推測されている[28]。要するに、ペルシア芸術の影響を受けたコロマンデル製手描き染めの綿布が、フランスにも輸入され「ペルス」という呼称が生まれたのである。

残念ながら、リシュリュー・コレクションには、ペルスの布見本は収録されていないものの、ポンパドゥール夫人の財産目録には記録が存在している。たとえば、現在のエリゼ宮にあたるエヴルー大邸宅Hôtel d'Évreuxの三階には、「ペルスの天蓋付き寝台」が、庭に面した家具のある部屋には「ペルスで覆われた羽毛入り枕」があったという記録が残されている[29]。このような寝具類の他に、椅子のカバーやカーテン、部屋着やスカートなどに使われたペルスが全142件も記載されている。とりわけ、パリのレイニー邸にある衣装保管部屋には、ペルスのローブとペチコートが１点、部屋着が７点、婦人用上着とスカートが５点ほどあることが目録に記載されており、ペルスは衣類の素材としてもよく使われていたことを確認することができる[30]。

7．トワル・ドランジュ（Toile d'Orange）

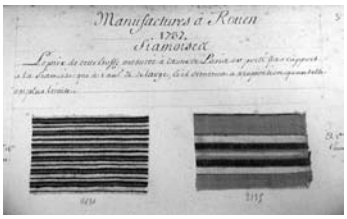
「トワル・ドランジュ」Toile d'Orangeとは、フランス南部の都市オランジュで生産された布という意味で、手描き染め、またはプリントされた布を指すことばである。この布は綿布を染めたもので、上質のインド産とイギリス産を模倣して作られている[31]。スイス人のデュ・カントン・ダパンツェルは、1736年に、マルセイユ近郊のユヴォンヌの海岸に工場を設立した。そしてその管理人ジャン＝ロドルフ・ヴェテルが、20年間、工場を経営したとされる。1757年になると、ヴェテルはマルセイユを去り、オランジュにアンディエンヌを生産するための工場を新たに建設し、工場は発展を遂げた[32]。つまり、トワル・ドランジュは、オランジュに建造され、成功をおさめた工場の生産品につけられた名称である。

トワル・ドランジュに関する記録は、ポンパドゥール夫人の財産目録に残されている。それは、レイニー大邸宅の衣装部屋にある「トワル・ドランジュのローブとペチコート」である[33]。

8．シャモワズ（Siamoise）

ジャック・サヴァリ・デ・ブリュスロンの辞書によれば、「シャモワズ」Siamoiseは、「1687年のシャム大使訪問によって、フランスに初めて紹介された絹と綿の交織布である。しかし、この布はそれほど長く使用されることはなかった。結果として、このことばは、よく染色された多様な色彩の縞模様の綿布を称するものになった」[34]と説明されている。リシュリュー・コレクションにおける織物の見本集に目を向けてみると、整理番号408番から418番には、1736年にフランス北西部の低ノルマンディーBasse Normandie地域のメスレーMeslayで生産された「コトナドまたはシャモワズ」Cottonade ou Siamoiseと称される布見本が収録されている。これらは、白・青・赤・緑・黄色の横または縦の縞模様からなる。たとえば、417番の布見本はローブ向けのものとして、418番の布見本は「カザカン」Casaquinおよび「ジュポン」Jupon向けのものとして記載されており、１オンヌあたり１リーヴル10ソルから４リーヴルまでの価格帯で販売されている[35]。４リーヴルという販売価格は、他の綿布と比較しても、高い値段である。さらに整理番号573番から575番までの布見本にも、ナントで生産されたシャモワズが収録されており、これらはフランス、アメリカ、ギネーおよびアイルランド向けのものであると説明されている。573番のものは白地に黒の縞模様で、女性用部屋着向けの布地であると記されている。先述した布見本に加え、2117番から2159番には、フランスの北部のセーヌ河畔の都市ルアンRouenで生産されたシャモワズが収められている（図４）。1693年に建設されたルアンの工場では、緯糸を綿、経糸を麻で交織した「シャモワズ」や、縞模様の布である「トワル・レイエ」Toile rayée、チェック模様の布である「トワル・ア・カロー」Toile à carreauxが主に生産された。白・青・赤・黄・緑・黒などの色彩が、細い線あるいは太い線で縞模様をなしており、明るく軽快な感じを与えている。パリで販売された際の価格は、１オンヌあたり２リーヴル10ソルから２リーヴル16ソルである。

シャモワズは、ポンパドゥール夫人の財産目録において、エヴルー大邸宅のカーテンをはじめ、ヴェルサイユに所有する大邸宅のベッドカバーや、パリのベルー・イスル大邸宅 Hôtel de Belle-Isleにある肘掛け椅子と肘掛けのない椅子のカバーなどに用いられたと記録されている[36]。総数29件のシャモワズの使用が財産目録には記されており、主な内訳はベッドカバーに使われたものが13件で、カーテンに使われたものが５件である。その他に、タピスリーなどにも使用されたことが記録されている。



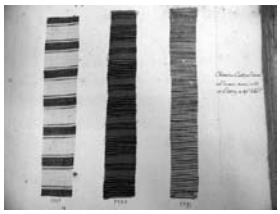


図４（左）《Siamoise》
Maréchal de Richelieu, *Ibid.*, LH45(C)-FOL, no.2131, 2135.

図５（右）《Chinoise》
Ibid., no.2289, 2290, 2291.

9．シノワズ（Chinoise）

フランス語の形容詞「シノワズ」Chinoiseは、「中国の、中国風（趣味）の」という意味である。リシュリュー・コレクションにおける布見本に収録されているシノワズは、ルアンで生産された綿布であると記録されている。整理番号2279番や2281番、2286番、そして2289番から2291番までの布見本は、色とりどりの縞模様のシノワズとして収録されている（図５）。これらは、１オンヌあたり45ソルから50ソルという価格帯で取引され、非常に安い値段がつけられている。

10. その他の綿布

先に述べたアンディエンヌ以外にも、リシュリュー・コレクションやポンパドゥール夫人の財産目録には様々な綿布が収録されている。リシュリュー・コレクションの整理番号2303番から2310番にかけては、フランス北

西部のルアンで製造された「フュテンヌとバザン」Futaines et Basinsが収録されている。フュテンヌとは「衣服の裏地やキャミソール、ブラシエールに使われたり、敷物などを覆う綿布」[37]のことである。ポンパドゥール夫人の財産目録の中には、エヴルー邸の部屋に「チェックのフュテンヌで覆われた敷物が12枚」、および「フュテンヌで覆われたウールの敷物が２枚」[38]使用されたということが記録されている。総数にして61件のフュテンヌの使用記録が記されており、とりわけ敷物のカバーとして使用された例が36件で最も多く、その他に椅子や枕カバー、手拭いにも使われていたようである。

フュテンヌの一種である綿布「バザン」Basinは、リシュリュー・コレクションの整理番号482番から484番、576番から580番に収録されているが、これはフランス西部のコニャックCognacやナントNantesの工場で生産されたものであると記録されている[39]。ポンパドゥール夫人の財産目録にも、「インド製のバザンで飾られた肘掛け椅子２脚」、「羽毛が詰められた長枕」など、総数56件が収録されている[40]。そしてこれは長枕および枕に使われた30件の例の他にカーテンや椅子のカバーなどにも用いられている。さらにバザンは衣類にも使用され、バザンのローブやスカート、スカーフが記録されている[41]。

「クティ」Coutilについては、94番から102番、336番から340番、607番から611番にかけて、総数36枚の見本が収録されているが、これらは綿布あるいは綿と麻の交織布であると記録されている。これらはフランスの中東部にあるブルゴーニュBourgogne地方のアヴァロンAvallon、北部のサン・ロSt.Loで生産されたものである。そして、2210番から2217番までのものは、ルアンの工場で生産された綿布と記され、「クティ・ド・シャス」Coutils de chasseと称されている。この名称は、これが狩猟（シャス）用の衣服を作るための布として使用されていたためと説明されている。

そして、リシュリュー･コレクションの整理番号215番には「リノン」Linonが収録されており、リノンについての説明もわずかに書き残されている。それは、「リノンが夫人たちの間で綿布の一種として知られており、主に被り物や胸飾り、袖飾り、スカーフとして使われている」というものである。実際、ポンパドゥール夫人の財産目録には、「リノンの化粧着の飾り」や、「６つの部分からなる窓用のリノン製小カーテン３枚」に加え、寝間着、被り物および袖飾りにリノンが使用されたことなど、９件が記録されている[42]。

リシュリュー・コレクションにはさらに多くの名称が記されている。「コトニンヌ」Cottonine、「コトン・レイエ」Cotton rayé、「トワル・ド・コトン」Toile de cotton、「ムシュワール・ア・タバ」Mouchoirs à tabac、「パスマンティエー・モンティシューまたはサティナド」Passementiers montichous ou satinade、「トワル・ド・コトン・ブロシェ」Toile de cotton brochéなどであり、これらもフランスで生産されていると記されている。

11. 結論

リシュリュー･コレクションにおける織物の見本集とポンパドゥール夫人の財産目録を分析した結果、フランスで生産されたアンディエンヌの模造品は異国風の名称だけでなく、生産地および輸出先によって多様な名称が存在していたことが明らかとなった。シャムの大使の服装から由来したが元来はシャムの国を指すことばであるシャモワズと、中国風を意味するシノワズは、双方ともフランスのルアンで生産され、パリを中心としたフランス内で消費された綿布であった。フランスで生産されたにもかかわらず、シャモワズとシノワズという東洋の国からの名称が付けられたのは、綿布に東洋趣味を感じさせるためである。

一方、トルコ、インドから輸入した綿布を用いてフランス国内で再生産を行ったアンディエンヌ模造品は、アフリカへ貿易品として再輸出されていた。アンディエンヌは、インドからの輸入品としてアジアとヨーロッパの交易品であると知られていたが、実際はヨーロッパとアフリカとの交易品としても盛んに取引されたのである。フランスで生産されアフリカに輸出されたアンディエンヌ模造品には、ギネー、アンディエンヌ・サン・ジョゼフなどアフリカの地名、取引先のアフリカと関係した多様な名称が付けられた。

綿布に関するこのような名称の多様性は、アンディエンヌが盛んな国際交易、模造品生産および消費の対象であったことを表している。また、多くの種類の綿布が、衣類だけでなく、調度品としても幅広く用いられたのであり、このことは綿布がいかに流行し、人々がこれを好んだかを示している。

註

1　深沢克己『商人と綿更紗：近世フランス＝レヴァント貿易史研究』東京大学出版会、2007年。

2　David Jenkins, *The Cambridge history of western textiles* I, Cambridge University Press, 2003；辻ますみ『ヨーロッパのテキスタイル史』岩崎美術社、1996年。

3　Maréchal de Richelieu, *Echantillons d'Etoffes et Toiles des Manufactures de France et étrangères*, 1732-1737, Paris ; LH45-FOL à LH45(F)-FOL, フランス国立図書館所蔵。

4　ロジェー＝アルマン・ヴェイジェール『18世紀フランス織物』宮川淳訳、美術出版社、1964年、7-12頁。

5　Jean Cordéy, *Inventaire des biens de Madame de Pompadour rédigé après son décès*, Francisque Lefrançois Libraire, Paris, 1939, pp.7-23.

6　目録番号一つに一つの品目ではなく、数十の品目が記載されている場合が多いため、全体の数量は2864個よりも多い。

7　林精子「《カフェを飲むスルタンヌ》におけるポンパドゥール夫人のトルコ風衣装」、『服飾文化学会誌』Vol.8、No.1、2007年。

8　*Galerie des modes et costumes français*, dessinés d'après nature, gravés par célèbres artistes en ce genre, Ouvrage commencé en 1778, chez Esnault et Rapilly, 1778-1787, Paris ; Forbonnais, François Véron Duverger de, *Examen des avantages et des désavantages de la prohibition des toiles peintes*, Marseille, 1755.

9　Pierre Richelet, *Dictionnaire François*, Genève, 1680 (Slatkine Reprints, 1994), t. II, p.426.

10　Antoine Furetière, *Dictionnaire universel*, Corrigé et augmenté par Henri Basnage de Beauval, Nouvelle edition revû, corrigé et considérablement augmenté par Jean Baptiste Brutel de la Rivière, 1690, (1972), t. II, Indienne項目。

11　Jacque Savary des Bruslons, *Dictionnaire universel de commerce, d'histoire naturelle, et des arts et métiers*, Paris, 1750, Vol.2, p.907.

12　Henri Havard, *Dictionnaire de l'ameublement et de la décoration depuis le 13e siècle jusqu'à notre jours*, Paris, 1838-1921, (1999), p.40.

13　Jean Cordéy, *op.cit.*, p.122, 財産目録1642番：《une autre housse de lit en baldaquin, d'indienne rouge》; p.105, 財産目録1415番：《Un fauteuil foncé de paille, garny d'un coussin, couvert d'indienne》; p.76, 財産目録1100番：《un autre robe d'indienne noir et blanc》, etc.

14　17、18世紀の辞典によれば、「パン」は１幅の布と説明され、正確な寸法を表しているわけではない。; Pierre Richelet, *op.cit.*, t. III, p.19 ; Antoine Furetière, *op.cit.*, t. III, pan項目。;「ソル」は、スーsou（５サンチームに相当する貨幣単位）の古形。

15　Pierre Richelet, *op.cit.*, t. II, p.334.

16　フィリップ・オドレール『フランス東インド会社とポンディシェリ』羽田正編、山川出版社、2006年、34頁、60頁。

17　Henri Havard, *op.cit.*, t. II, p.1241.

18　*Grand dictionnaire encyclopédique larousse, Libraire Larousse*, Paris, t. V, 1983, pp. 5057-5058.

19　藤井真里『フランス・インド会社と黒人奴隷貿易』九州大学出版社、2001年、23頁; Jacque Savary des Bruslons, *op.cit.*, t. II, pp.448-449.

20　同書、103-107頁；P. Curtin, *Economic change in Precolonial Africa, Supplementary Evidence*, Wisconsin, 1975, p.4, 260.

21　１リーヴルは約１万円に値する；小林良彰「経済史としてのフランス革命」風間書房、平成４年、34頁。

22　深沢克己、前掲書、103頁。

23　藤井真理、前掲書、29-30頁。

24　同書、103-107頁、113-120頁。

25　深沢克己、前掲書、203-209頁。

26　Pierre Larousse, *op.cit.*, t. I, p.190.

27　深沢克己、前掲書、103頁。

28　同書、167-168頁。

29　Jean Cordéy, *op.cit.*, p.10, 目録番号92番：《un lit en baldaquin de perse》; p.13, 目録番号111番：《un oreiller de duvet couvert de perse》.

30　*Ibid.*, p.14, 目録番号113番：《une chaise percée, en encoignure, en bois de palissandre et violet, couvert d'un autre en dossier; le tout de perse peinte en or》; p.14, 目録番号115番：《dix rideaux de toille de cotton garnys de découpure de perse》; p.74, 目録番号1097番：《robbe de chambre et son jupon de perse fond rouge》,《casaquin et son jupon de perse》, etc.

31　Henri Havard, *op.cit.*, t. II, p.1168.

32　H. Chobaut, L'industrie des Indiennes à Avignon et à Orange (1677-1884), *Extrait des mémories de l'academie de vaucluse*, Avignon, 1938, pp.16-19.

33　Jean Cordéy, *op.cit.*, p.75, 目録番号1097番：《une robbe et un jupon de toille d'orange》.

34　Jacque Savary des Bruslons, *op.cit.*, Vol.4, p.779.

35　「カザカン」Casaquinとは、後ろの見頃にひだのついた、短い上着である。「ジュポン」Juponとはスカートのことである。18世紀にはこの二つを合わせて着た。

　オンヌは布やリボンの長さを測る単位で、地域によって違う。；Antoine Furetière, *op.cit.*, t. I, aune項目。

36　Jean Cordéy, *op.cit.*, p.19, 目録番号165番：《un rideau de fenestre en deux parties de même siamoise》; p.114, 財産目録1550番：《la housse d'un lit siamoise verte et rouge》; p.125, 財産目録1665番：《douze fauteuils et deux chaises garnies de crin, couverts de siamoise de Rouen bleu et blanche》, etc.

37　Pierre Richelet, *op.cit.*, t. II, p.257.

38　Jean Cordéy, *op.cit.*, p.17, 目録番号144番：《douze matelats couverts de toile à carreaux et futaine》; p.20, 財産目録168番：《deux matelats de laine couverts de futaine》.

39　Pierre Richelet, *op.cit.*, t. I, p.273.

40　Jean Cordéy, *op.cit.*, p.11, 目録番号101番：《deux autres dessus de fauteuils de bazin des Indes》; p.112, 目録番号1527番：《un traversin de bazin, rempli de duvet》, etc.

41　*Ibid.*, p.57, 目録番号598番：《deux mouchoirs de bazin des Indes à fleurs》; p.76, 目録番号1100番：《une robbe de bazin des Indes》,《une autre robbe et son jupon de bazin des Indes, brodée en soye noir》; p.81, 目録番号1135番：《Dix jupons de bazin des Indes》.

42　*Ibid.*, p.81, 目録番号1139番：《Une garniture de peignoirs, aussy de linon》; p.80, 目録番号1131番：《quatre autres bonnets pareils, une autre de linon brochée》《une paire de manches à trois rangs, pareils de linon broché》; p.81, 目録番号1137番：《un autre manteau de lit de linon broché》, etc.